

◆ 想像もしない未来へ ◆

時々母校の大学新聞を読んでいる。お目当ては「卒業生からの手紙」というコラム。

そこにはお一人おひとり違った来し方行く末があり、毎回元気をもらう。懐かしい思い出とともに、ご自分のピンチの状況にどのように対処したのか、という内容が多いように思う。特にこの1年、本当にいろいろなことが押し寄せたこの1年は、このコラムから考えさせられることが多かった。



令和3年2月1日号（第361号）に「表現で人の役に立ちたい」というタイトルで、現在NHK松江放送局アナウンサー、藤原陸遊さんの「手紙」が掲載されている（[同号 7面](#)）。

読み進めながら、「ああ、この風景そうだった、そうだった」と頷く。

ご自身が加入されていたサークル活動についての思い出。これが今の自分を支えてくれている、という内容に、ここにも同じような日々を過ごした後輩がいたのだなあとうれしくなる。

振り返ればサークル活動漬けの日々であった。

所属していた管弦楽団。年2回の定期演奏会のほか、小中学校での音楽教室なども実施した。音楽は瞬間芸術であり、それまで練習してきた曲は、あっという間に通り過ぎてしまうけれど、そんな中にも、記憶に残る瞬間が、ある。

藤原さんはこの「手紙」の後半に、こう書いている。

「本当に自分が好きなことや大切なことに向き合った経験が想像もしなかった場所へ連れて行ってくれることがあります。大学はそのために開かれていたのだな、といまになって考えています。（後略）」

一人の友の顔が浮かぶ。彼は現在、在京のプロオケのコンサートマスターをしている。「大切なことに向き合っ」て、現在、（当時）「想像もしなかった場所」にいる。

こんな風に考えると、今の少し辛い状況も皆さんの肩を押してくれる「大切なこと」のように思える・・・。